

私は、流域住民でも、特定市民団体に所属する人物でもありませんが、学生時代に北海道日本海沿岸の漁業について学び、現在も日本水産学会会員として水産業の発展に寄与する立場にある身です。近年、水産学の分野でも河川整備に対する関心が高まっており、私も天塩川の河川整備が北海道に水産業に与える影響を懸念しています。そこで、整備計画を漁業とそれを支える生態系保全の観点から見て、良好なものとするため苦言を呈させて頂きたく思います。

なお、ご承知のこととは思いますが、この意見は私個人の意見であり、私が所属する特定の団体の意見ではありません。

1. 治水と環境・水産資源保全の両立について新規委員会を設置し、議論を深め、追加調査を行うことを提案します

残念なことに、治水と環境・水産資源保全の両立について十分な議論が行われたとは思えません。河川法には「第十六条の二 3 河川管理者は、河川整備計画の案を作成しようとする場合において必要があると認めるときは、河川に関し学識経験を有する者の意見を聴かなければならない。」との定めがあります。しかし、残念ながらサクラマス問題については、この条項に従い水産資源の魚道とサケマスに関する専門家を招致するのが最善策だと思われませんが、そのような手段がとられていないからです。

2. 1.で提案する新規委員会の構成について以下のようなことを提案します。

河川工学者、生態学者に加え、水産資源研究の関係者でサクラマス資源の研究に取り組んできた人物を加えることを提案します。サクラマス問題を解決するには、そのサクラマス資源研究の分野に対して取り組んできた人物から意見を取り入れることが必須です。

3. サクラマスについて次の3-1)～3-4)の4点を提案します。

近年、資源減少が言われており、その原因としては河川環境の改変が取り上げられています。北海道日本海側では冬期の漁業資源として重要種です。しかし、本種の資源は主として自然産卵により支えられており(宮腰, 2006)、回遊範囲も広いことから(真山, 1998)、天塩川のような大河川における個体数減少が北海道沿岸における漁獲量減少、すなわち河川整備による漁業被害、を起こす可能性があります。このことから、その保全対策には慎重に取り組んでいくことを提案します。

3-1)天塩川水系各河川のサクラマスの遺伝的形質について調査を行うことを提案します

遺伝的な多型性が高くサクラマスは河川ごとに遺伝的な独立性が高いことが示唆されています(Okazaki, 1986)。日本は生物多様性保全の国家戦略を策定し、遺伝子資源の保存に国として取り組んでいます。特に、サクラマスのような水産上有用種において遺伝子資源の保全を行うことは、増殖事業における有用系統の作成や、自然産卵資源の安定的な再生産と漁獲を保証する上で重要課題です。

河川整備後にサンル川、もしくは天塩川水系全体でのサクラマスの資源量が維持されていても、遺伝的な多様性が失われた場合、それは資源が質的に劣化することを意味します。サクラマスが産業上重要種であることを鑑みると、経済的な面から遺伝子資源の劣化が引き起こす損失は大きいと考えられます。

また、北海道では道経済立て直しのためのバイオ産業の振興に取り組んでいます。これは北海道に豊富で多様な生物と遺伝子資源があることが大前提です。

3-2)産卵床について再調査を行うことを提案します

開発局側と市民団体とでは調査結果の数値が大きく異なっています。これは、異なる調査方法でデータを収集すると結果が大きく異なることを表しており、適切な調査方法を検討する必要性を示しています。このため、開発局側のデータは調査努力量が少ないために産卵少数を過小評価していないかという疑念や、市民団体のデータについて過大な調査努力量による産卵床数を過大評価していないかという疑念が生じます。つまり、現時点ではどちらのデータがサンル川の産卵床数を適切に表しているのか分からないということです。両者のデータの比較を行い、調査方法について再検討したうえで、再調査を行うことを提案します。

また、調査については混乱を避けるために、公開で行うことを提案します。

3-3)サンル川と名寄川周辺における治水と利水について、代替策の集中的な議論を提案します

多目的ダムという大型建造物ではなくて用途を絞った小規模建造物を複数作ることで環境への影響を小さくしつつ、必要な目的を達する方策もあると思います。大規模ダムで問題になるのは高い堤体がサクラマスの遡上を阻害する可能性があること、広大な止水面積が生じることで産卵床が破壊された上に、サクラマスの降下を阻害する可能性があることです。遡上阻害については、開発局でも魚道の技術開発を精力的に行われていることから、解決策が見つかることも考えられますが、降下対策はダム機能の根幹に関する問題ゆえに、解決策が見つかるかは不明です。委員会の議論で重要視されていた名寄市周辺での治水と利水の2点について、例えば穴あきダムや可動式取水堰などの環境影響が小さい代替施設を組み合わせる方法を検討することを提案します。

3-4) ダム案のサクラマス対策費用についても費用対効果を検討するようことを提案します

ダム案について第18回委員会で示している人員による運搬などサクラマスの恒久的な降下対策および、委員内で提案されている魚道の試験研究に掛かる費用についても公開し、議論を行うことを提案します。

4) その他生物について以下2点を提案します

4-1) カワシンジュガイについて遺伝的調査を行うことを提案します

カワシンジュガイについてサクラマスと同様に遺伝的調査の必要性を感じます。天塩川本流にも大規模生息地があると第18回委員会にて報告されていますが、天塩川本流とサンル川において遺伝的に異なる場合は、生物多様性保全の国家戦略に基づいて別の集団として保全策を講じる必要があります。早急に遺伝子に関する調査を行うことを提案します。

4-2) オオジシギについて繁殖状況を調査することを提案します

環境影響評価結果(H7年6月)91-3頁において影響が軽微であるとの評価が行われています。この評価は生息だけでなく営巣についての調査をした上で判断をしているのか懸念抱いております。本種は日豪渡り鳥条約の保護対象種であり、条約の第三条1では「各政府は、絶滅のおそれのある鳥類の種又は亜種の保存のため、適当な場合には、特別の保護措置をとる。」と定められています。このような鳥類の場合、保全対策を間違えると国際問題に発展可能性があります。厳密な調査と適切な保全策を希望します。

5. 幅広く人々の意見を聞く姿勢を明確に示すことを提案します

今回の意見募集が当初、流域住民に限られていたことをはじめとし、残念ながら開発局からは幅広く人々の意見を聞く姿勢があるように思えません。地域住民の意見をまず大切にするという姿勢は大事だと思いますが、公共事業の説明責任の重要性が言われ、公共事業に対する不信感が強い現状において、このような開発局の姿勢は非常にマイナスだと思われます。

(引用)

宮腰 靖之, 2006, 1-2. サケ科魚類の増殖管理に関する研究の現状と将来展望. シンポジウム1. 北海道のサケ研究の現状と将来展望, 日本水産学会北海道支部大会, 平成18年12月15日(金)~16日(土). 眞山 紘, 1998. サクラマス増殖と調査研究の将来方向. さけ・ます資源管理センターニュース No. 2. Okazaki, T., 1986. Genetic variation and population structure in masu salmon *Oncorhynchus masou* of Japan. Bull. Jap. Soc. Sci. Fish, 52:1365-1376.